

土の遺跡物語

栄会場展

水を治め、
野を拓いた先人たちが

遺跡発掘調査速報巡回展2008

平成20年6月26日(木)～6月29日(日)

■開館時間 午前9時～午後4時半 ■入場無料
農村環境改善センター

■展示遺跡■

- ・速報展示 北浦A遺跡(大谷地地内)・高野遺跡(北五百川地内)ほか6遺跡
- ・テーマ展示 戸口遺跡(戸口地内)ほか栄地区遺跡

■体験コーナー■ 「不思議な土器の文様!」・「遺跡パズルにチャレンジ!」
「ドキドキ文様付け!」・「土器復元!」

■展示説明会■ 第1回6月28日(土) 第2回6月29日(日)
いずれも午後2時から(1時間程度)

■楽しいイベント■ 第1回6月28日(土) 第2回6月29日(日)
いずれも午前10時～午後2時
勾玉作り・縄文弓矢体験・火起し体験・縄文喫茶
※材料費がかかるものがあります。

主催 三条市 (市民部生涯学習課 電話 0256-34-5511 内線 406)
後援 栄遺跡発掘友の会・三条考古学研究会

しなのがわちくてい かみすごろ
信濃川築堤地区（上須頃ほか）

新しい堤防の工事箇所は、江戸時代まで屋敷があった場所です。遺跡が埋もれている可能性があるため試掘調査を行いました。2 m以上もの深さからガラス瓶などが出土しましたが、古い時代の遺跡は発見されませんでした。以前あった屋敷跡は、明治時



代の堤防を造る工事の際に土取りされ失われたと推定されますが、さらに地中深くに埋もれている可能性もあります。

確認された敷石（近現代ものか）

しもちよう にしおおさき
下町遺跡（西大崎一丁目）

遺跡の広がりを把握するため部分的な調査を行い、約1 mの深さから柱穴などが見つかりました。鋳型・炉壁などの遺物が出土し、周辺部に鍛冶・鋳物に関連した遺構があるものと思われます。

この遺跡は大崎鋳物師の本拠地と推定され、三条の金属産業史を考える上で大変興味深い遺跡です。



確認された柱穴など

みなみやち にしほんじょうじ
南谷地遺跡（西本成寺二丁目）

本成寺地区の遺跡分布を調べる調査で発見された平安時代の遺跡です。この地区の集落に隣接する微高地には、平安時代以降の多くの遺跡が発見されています。『壘田永年私財法』により、低地の開発が盛んに行われたことが遺跡分布からわかります。

平成19年度は民間開発に伴い、遺跡の広がりを調べるため確認調査を行ないましたが、遺構、遺物は確認されませんでした。



確認調査のようす

いしだ すどしんでん
石田遺跡（須戸新田）

石田遺跡は須戸新田地内にあり、標高約6 mの自然堤防上に立地します。地表から約1 mの深さから南北・東西方向の溝跡や土坑が見つかりました。遺物は溝跡や周辺から須恵器の食器や土師器の煮炊具が出土しています。遺跡周辺部には大槻瀉があり、内水面利用や低地の開発を考える上で重要な遺跡です。



発掘された石田遺跡

あまがり しもほない 安曲遺跡（下保内）

吉津川右岸の標高約 5.5mに位置します。県営ほ場整備事業吉津川地区に伴い調査を行い、溝跡や土坑、柱穴が確認され平安時代のムラの跡であることがわかりました。遺跡の北側では平安時代の木棺墓が検出されています。

標高が高い東側で遺構が集中し、特に南北方向に広がる溝跡や土坑が見つかりました。南北方向の溝跡はほぼ同じ向きであるため、同じ時期に使用されたと考えられます。遺跡の西側は地形が落込むため遺構は確認されませんでした。

過去の調査から、木棺墓が検出された北側や東側にムラの中心があると推定されます。



木棺墓



発掘された溝

たかの きたいもがわ 高野遺跡（北五百川）

粟ヶ岳の登山道沿いにある高野遺跡は、ほ場整備に伴い 192 m²を本発掘調査したところ、溝1条、ピット78基の多数の遺構と遺物が出土しました。この溝は平安時代ごろのものと考えられ、もともとの沢状の地形を掘削したものと考えられます。溝からは流れ込んだと考えられる旧石器時代と縄文時代の石器が出土しました。

溝の北側と南側には多数の建物跡が出土しました。調査地は駒出川を見下ろす高台であるため、見晴台のような建物が建っていたものと考えられます。



発掘された溝

いもがわ きたいもがわ 五百川遺跡（北五百川）

五百川遺跡は粟ヶ岳の絶景を望む標高 127mの駒出川左岸の河岸段丘上にある大集落です。

ほぼ完全な形の底のない土器が出土しました。辺りからは焼け石が多く出土し、炉に埋められた土器の可能性もありますが、周りの土は焼けていませんでした。そのため、炉跡ではなく、埋葬の儀式に伴って別の場所で火が焚かれ、それが終わった後、骨を土器に納め、焼け石とともにこの場所に埋めた可能性があります。縄文時代後期前半（約 3,500 年前）の土器です。



埋葬の儀式に関係した焼け石と縄文土器

きたうら おおやち
北浦A遺跡 (大谷地)

大谷地字北浦に所在する縄文時代の前期と後期を主体とした遺跡です。五十嵐川右岸の低位段丘上に立地する遺跡で市道大谷地枝の上線の道路改良工事に伴い260㎡を発掘調査しました。イエの跡1軒、土坑9基、柱穴36基、溝2条が発見され、コンテナ10箱分の遺物が出土しました。

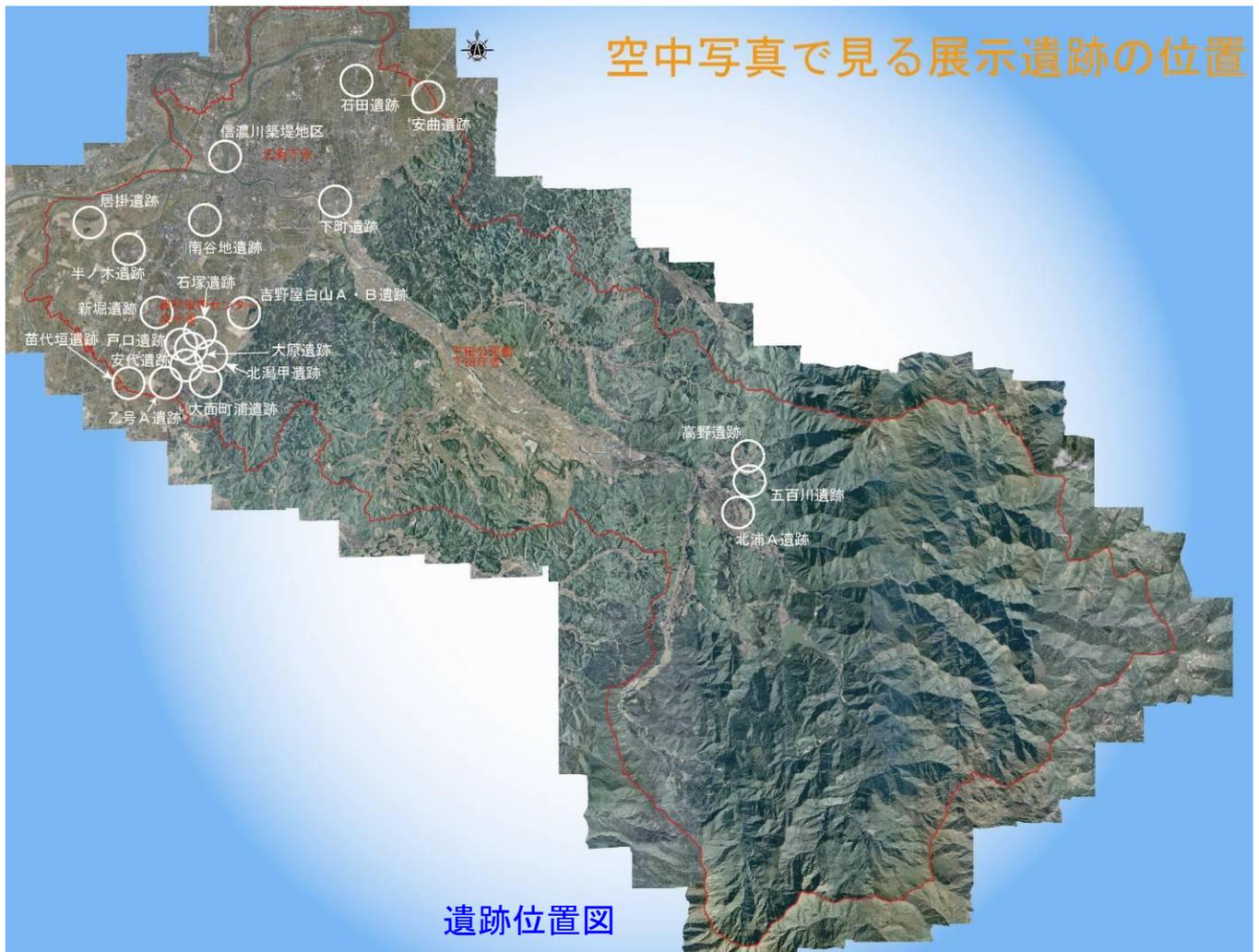
この遺跡からは、山住みのくらしの道具が各種出土しています。弓矢の矢の先につけ、狩りに使った石鏃の未製品や、魚捕りの網の錘に使った石錘や、採集した木の実を磨る潰す台石と磨石などが見つかります。イエの柱を建てる時に土を掘った道具と考えられる打製石斧も採集されています。



発掘された北浦A遺跡



発掘されたイエの跡



栄会場展 テーマ展示

水を治め、野を拓いた先人たち

1 テーマ展示にあたって はじめに

「水を治め、野を拓いた先人たち」という言葉をご存知でしょうか。旧栄町の町民憲章の冒頭の一節です。栄地区では、この言葉どおり数多くの遺跡が見つかっています。これらの栄地区の発掘資料を中心にテーマ展示を行ないました。

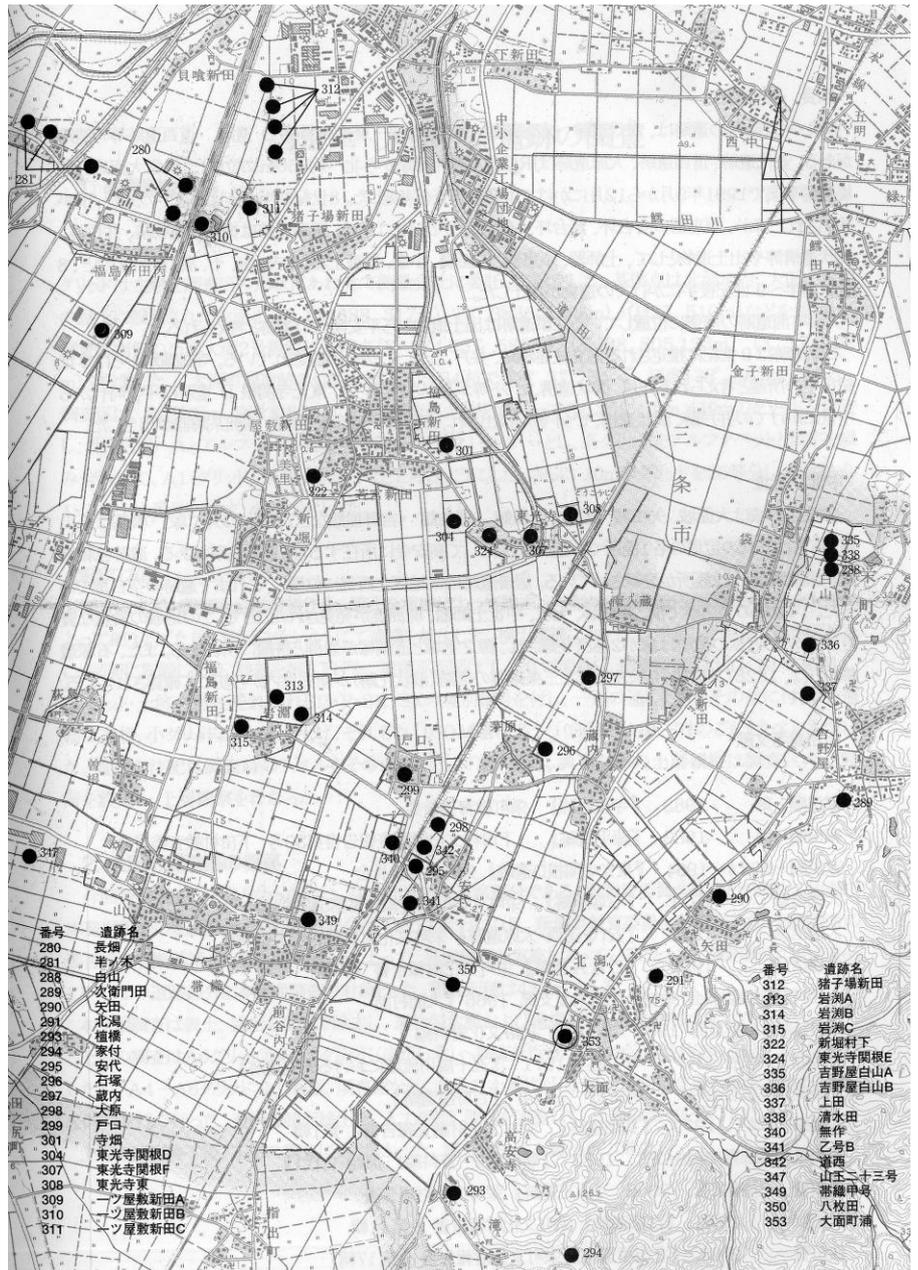
栄地区における低地の調査

1980年代に入りほ場整備や諸開発に伴い古代・中世の遺跡が発掘されるようになりました。河川のわきに発達した自然堤防上に人々が住み始めたことが明らかになってきました。

近年、北潟甲遺跡や乙号A遺跡で、これまであまり調査の進んでいなかった弥生・古墳時代の遺跡も発掘され、通史的な展開の中で栄地区の歴史が明らかにされるに至っています。

平成18年度に本調査が行なわれた戸口遺跡も低地の遺跡として成果を挙げています。

また、研究者による地道な分布調査が進められ、多くの低地の遺跡が新たに発見されています。



栄地区古代遺跡分布図

2 自然堤防上の遺跡

平安時代、低地への進出

栄地区の低地に先人たちが本格的に進出するのは、平安時代になってからです。技術の進歩に伴い新田開発が進み、低地に人々が暮らす基礎が作られました。もともと、湿地帯であった栄地区の平野部には、河川によって自然堤防が発達しています。ムラは、その一段高くなった自然堤防上につくられ、川の流路沿いに帯状に点在していたと考えられます。

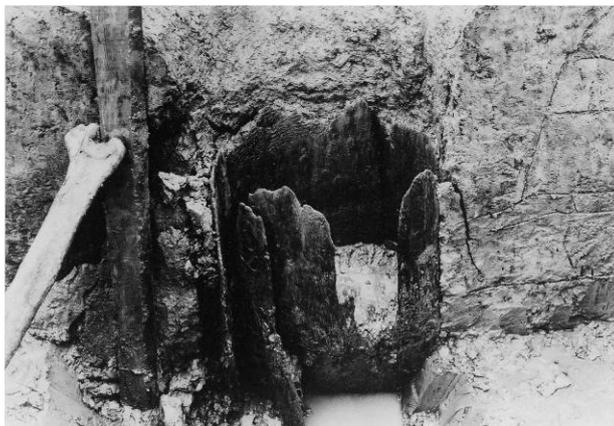
平安時代の遺跡は、半ノ木・安代・道西・大原遺跡ほか40箇所以上もあり、15遺跡が調査されています。このうち、自然堤防上に位置する遺跡が8割以上で、残りは吉野屋や大面などの丘陵付近に小河川によって形成された扇状地に確認されています。

平安時代の遺物

古代における自然堤防上の人々の暮らしぶりを語る遺物として土師器・須恵器・灰釉陶器・砥石などが挙げられます。平安時代の遺跡からは土師器の甕や坏、須恵器の坏や大甕などが出土しています。土師器は地元でも焼いて作ることができますが、須恵器は窰窯と呼ばれる施設で焼かれるため生産地と消費地が離れています。栄地区では佐渡の小泊や出雲崎・和島付近の西古志窰や新津産の須恵器が発見されており、水運を利用して当地に供給された事は想像に難くありません。

井戸に転用された舟

半ノ木遺跡から発見された第1号井戸は、井戸側材として折断された杉材の丸木舟が使用されていました。この井戸は水の出がよく、調査当ても1時間ほどで水が一杯になったそうです。井戸からは土師器や須恵器の他、施釉陶器や文字は不明ですが、墨書土器が出土しています。こうした舟は当時の水運を想定することができ、頻繁に利用されたと考えられます。

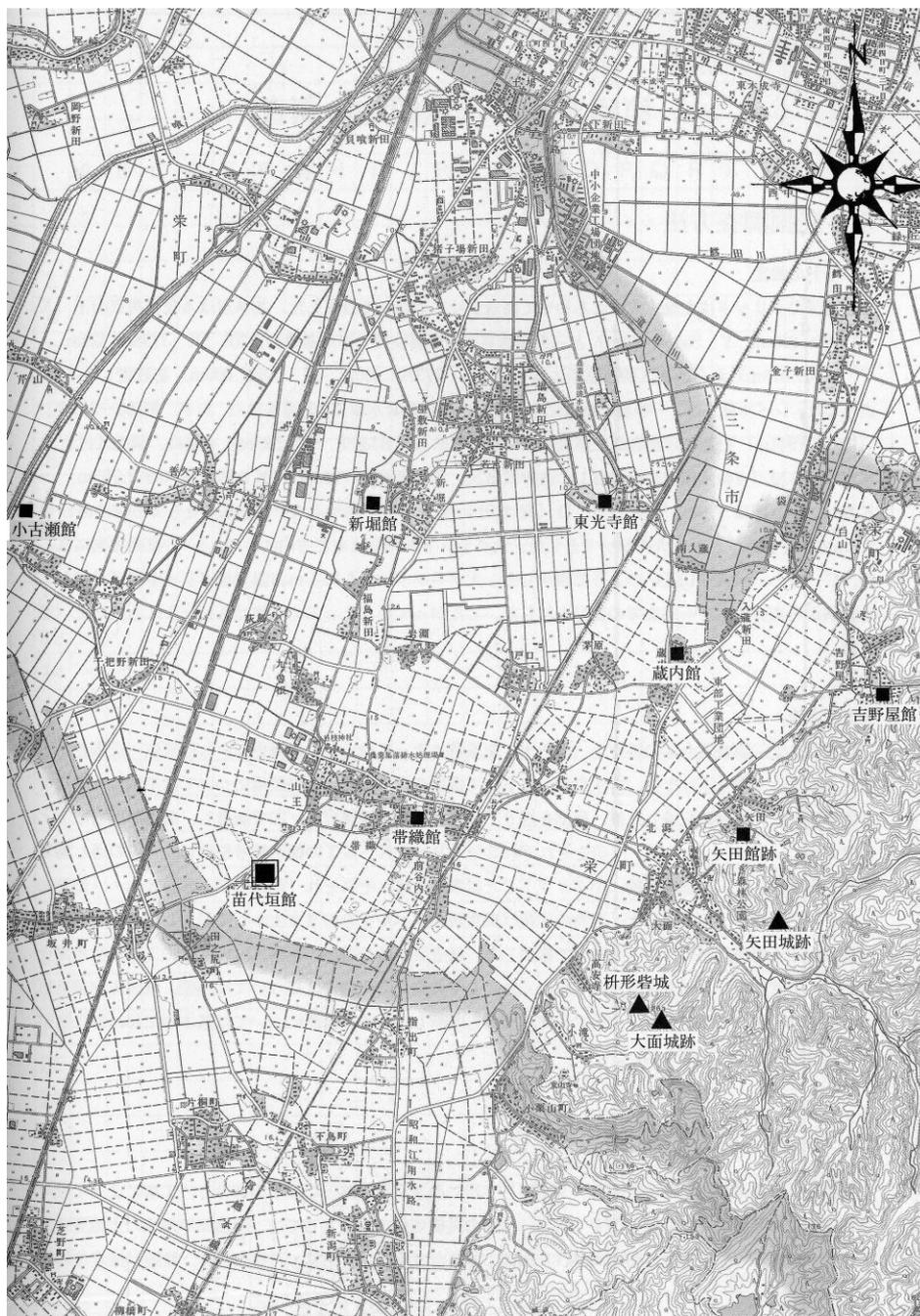


半ノ木遺跡 井戸

中世「大面荘」への展開

中世に自然堤防上に形成されたと考えられる中世城館は、小古瀬館・新堀遺跡・苗代垣館・東光寺館・蔵内館の6箇所があり、このうち新堀遺跡と苗代垣館では調査が行なわれています。また、丘陵や山地側には矢田館・矢田城跡・枅形砦跡・大面城跡が知られており、矢田館跡は調査がされています。

「大面荘」の地名がはじめて文献上で確認されるのは、文治2（1186）年3月12日の箇所です。大面荘は鳥羽十一面堂領でしたが、二年後の文治4（1188）年になると八条院領になる皇室御領の寄進地系荘園でした。大面荘は吉野屋条、帯織条、新方条、上条、下条、見附条、石地条などの「条」に分かれていました。



栄地区中世城館分布図



自然堤防上の中世遺跡例 (居掛遺跡)
(東上空より)

3 とくちいせき 戸口遺跡の調査

調査の概要

市道矢田・中曽根新田線の建設に伴い平成17年に確認調査を行ない、平成18年に本調査が行なわれました。

さらに東側に道が延びるため平成19年にも遺跡の範囲を確認する調査が行なわれました。

今回、栄地区ではじめて成果を展示する機会になりました。

自然堤防上に立地する戸口遺跡では、2つの時期に集中して人々が住んでいた痕跡が発見されています。



戸口遺跡の全景航空写真（西から）

平安時代の戸口遺跡

今から1,100年前の平安時代（9世紀後半～10世紀前半）には、掘立柱建物跡や溝跡が発見され、須恵器や土師器が出土しました。掘立柱建物跡は溝跡で区画されており、ほとんどが桁行2間×梁行3間であり、区画溝の方向にあわせる形で並んでいました。戸口遺跡の東側には8世紀から9世紀の安代・道西・大原遺跡が存在しており、その関係が注目されます。また、10世紀中頃以降急速に衰退することから、村落の形成過程や変化を考える上でも大変意義深いです。

中世の戸口遺跡

今から700年前の中世（13世紀前半～14世紀頃）の遺構は、掘立柱建物跡や井戸跡が発見され、珠洲焼のすり鉢・青磁・中世土師器や砥石が出土しています。わざと底に穴を開けたすり鉢も発見されていますが、用途は不明です。また、鞆の羽口が発見されており鍛冶が行なわれていた事が判明しています。中世の遺構は文献に出てくる「大面荘」内に存在すると想定されています。今回の大形掘立柱建物の発見や鉄滓や鞆の羽口の出土などから大面荘を考える上で貴重な遺跡と言えます。



すり鉢



鞆の羽口

4 残された文字

吉野屋白山B遺跡 ～土器の大量出土～

栄地区では半ノ木遺跡・岩淵A遺跡・大面町浦遺跡などで墨書土器が数点出土しています。

吉野屋白山A・B遺跡では1989年と1992年にほ場整備に伴う調査が行なわれ、掘立柱建物跡、大量の土器が廃棄された跡や橋の橋脚部が残存した溝跡が発見されました。この土器の中には墨書土器や棒状の工具によって文字が刻まれた刻書土器、漆で文字が書かれた土器が発見されています。墨書土器の内容は「大」と記されたものが最も多く、人名と思われる「秋田万」や人名か地名か定かではありませんが「宇奈」と書かれた土器が出土しています。人名と思われる「梶万呂」と書かれた土器は、岩淵A遺跡からも出土しています。土器の廃棄された理由として、特別な時に利用した土器を同じ場所に捨てるという習慣とも考えられます。

中世の木簡

1997年に調査された新堀村下遺跡では、中世の木簡が出土しており、一面には「蘇民将来之□□」、その逆面には「急急如律令」と書かれており、径約1mの土坑内から漆器の椀とともに出土しました。「急急如律令」は、陰陽道のまじないの決まり文句です。蘇民将来の信仰は諸説あり、現在でも「蘇民将来之子孫也」と書かれた札や符を配ったり、茅の輪くぐりなどがあります。

三条地区では綾ノ前・菖蒲沢遺跡で「蘇民将来」と書かれた木簡が出土しており、蘇民将来の信仰は、三条地区の三条八幡宮や一ノ木戸神明宮の茅の輪くぐりなど現在にも生きています。

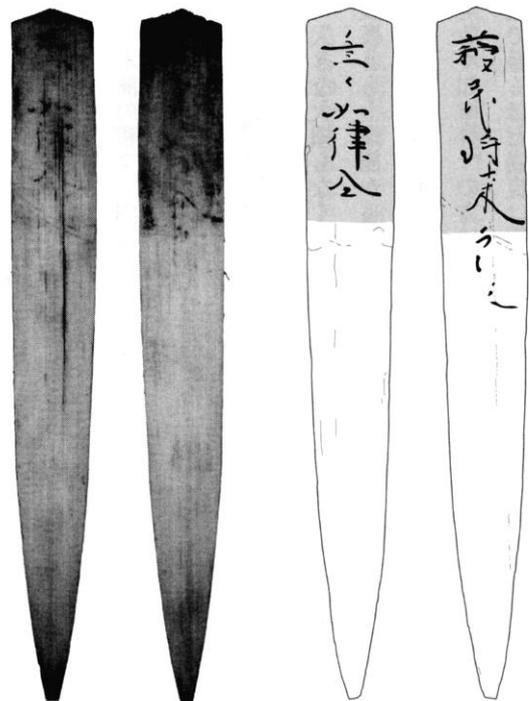
5 おわりに

栄地区では、古代、中世と低地の開発が行なわれ、水との戦いの連続でした。栄地区は信濃川と刈谷田川の大きな河川の間を大面川、貝喰川などの支流が流れているため、絶えず水害に悩まされてきました。また、一方で、人々は水を治め、利用し、共存して生活してきました。

中世の遺跡から出土する祭祀遺物などは、何を願ったものなのでしょうか？土の中に残された痕跡からは水害と向き合い、水と共に生きてきた人々の思いが息づいているかのようです。



白山B遺跡の土器集中



新堀村下遺跡出土 木簡

三条ものづくりのルーツをたずねて

三条のものづくりのルーツは、実は旧石器時代の2万5千年前まで遡ることができます。今から約2万年前に近畿地方と同じ形の石器が、御淵上遺跡（長野）で作られます。その後約1万3千年前に、替え刃式の石器である細石刃が中土遺跡（長野）に登場します。この替え刃の製作技法は、シベリアや北海道など北方系の作り方をしています。これらの石器は、槍先に取り付けられ、狩りに使われたと考えられています。

石と鉄という素材は違っても、すばらしい切れ味の道具を追い求めた想いは今の私たちに伝わり、「金物のまち三条」に活かされています。

復元された旧石器時代・縄文時代の道具

市内の旧石器・縄文時代の遺跡で出土する石器を、当時の技法で復元しました。

旧石器時代の槍は古い順に、割った石のカケラの特徴を活かすナイフ形石器、一番槍らしい形の尖頭器、替え刃式の細石刃を取り付けた槍が作られました。

約1万2千年前に縄文時代になると、弓矢が発明され、それを使ってシカなどの狩りが行なわれます。約2,000年前の赤松遺跡（大谷地）は、矢じりの工場と考えられる遺跡で約6,000点もの矢じり製作に関連した石器が出土しています。

磨製石斧は木を切り出したり、くり抜いたりする道具でした。また、打製石斧を使って土を掘ったり、地下に生えている山芋を掘ったりしたのでしょ。

石匙は個人用のナイフで紐を付けて首や腰から提げていたと考えられます。

漁労具は鹿の角や骨を使い、ヤスや魚に刺さると先端が外れ、銚先に付いた紐を使って魚を引き上げる回転式離頭銚などの道具や、釣針などが作られました。



復元された石器



復元された骨角器